

2007年12月22日

カネミ油症

2007.12/27
九大・福岡県
共同研究

胎児期汚染を高濃度物質

胎児期汚染を証明

国内最大の食品公害・カネミ油症で、認定患者の子供の臍帯（へその緒）に、主原因であるダイオキシン類のPCDF（ポリ塩化ジベンゾフラン）が通常より高濃度で含まれていることが長山淳哉・九州大准教授（環境分子疫学）と福岡県保健環境研究所の共同研究でわかった。胎児期にPCDFに汚染されたことが科学的に証明されたのは初めてで、認定基準の見直しにつながる可能性もあるという。

長山准教授らは4月、福岡、長崎両県の認定患者の子供である男女14人（15、36歳、うち6人は認定患者）から臍帯の提供を受け、数種類のPCDFの平均濃度を測定。親がカネミ油を摂取していない一般男女12人（18〜34歳）と比較した。その結果、平均濃度は一般が臍帯1g当たり0.09pg・g、ヒコは1兆分の1だったのに対し、子供は約64倍の5.8pg・gに達した。

さらに子供を30歳以上と

30歳未満に分けて比較したところ、30歳未満は0.7pg・gだったが、30歳以上は11pg・g。親の体に残留するPCDFは時間の経過により減少したとみられ、遅く生まれた子供ほど汚染が少なかった。

また、PCDFの中で最も毒性が高く残留しやすいタイプの平均濃度は、30歳以上が24.9pg・g、30歳未満が1.9pg・gだった。これに対し、一般からは全く検出されず、胎児期に被害を受けたことが明確

になった。

長山准教授は「今後は血液に含まれるPCDFの濃度も測定し、体内にどの程度取り込まれたのかを解明したい」と話している。

油症の認定患者は約1900人で、未認定は1万人以上とされる。子供の場合には油症特有の皮膚症状などが目撃されている。

カネミ油症 カネミ倉庫（北九州市）が製造した米ぬか油に製造過程で大量のPCB（ポリ塩化ビフェニール）が混入。1968年以降、これを摂取した西日本一帯の1万4000人以上が激しい皮膚症状や内臓、神経疾患などを訴えた。その後の研究で主原因はPCBが加熱されて生じたPCDFと判明した。